

# 生研庁舎付近の歴史

村松貞次郎・音川 惇子

生研庁舎付近の歴史的、人文地理的な紹介である。この地は、もとの麻布区に属するので、麻布区を中心に、その地勢・往古からの麻布の歴史および主要な歴史遺跡を解説する。また明治以降の当庁舎敷地および付近の変遷にふれ、あわせて庁舎建築の歴史にも言及した。さらに、付近の近代文学史上の遺跡の散歩も試みた。

## 1. はじめに

当研究所は昭和 36 年初頭、西千葉から現在の地に移転を開始し、昭和 37 年 11 月初旬に広く移転披露の行事が催されたのは記憶に新たなところである。

この土地にも、すでに満 3 年になろうとする。腰が落ちつくとともに、周囲を見わたす余裕もでてきた。本誌の性格からしてやや異例ではあるが、生研庁舎付近の歴史をつづって、お互いに早く“住めば都”になりたいと願うのである。残念なことに筆者らにとって、この土地は移転前まで、まったくの異郷だった。せいぜい調査したつもりであるが、にわか勉強は必ずボロが出るものである。古くからこの地にお住いの方の永い生活体験には及ぶべくもない。お気づきの点をご指摘下されば、まことに幸いである。

生研の現在地は東京都港区麻布新竜土町 10 番地である。港区は昭和 22 年赤坂・芝・麻布の旧三区を合したものであり、新竜土町はそれまで麻布区に属していた。麻布区の称

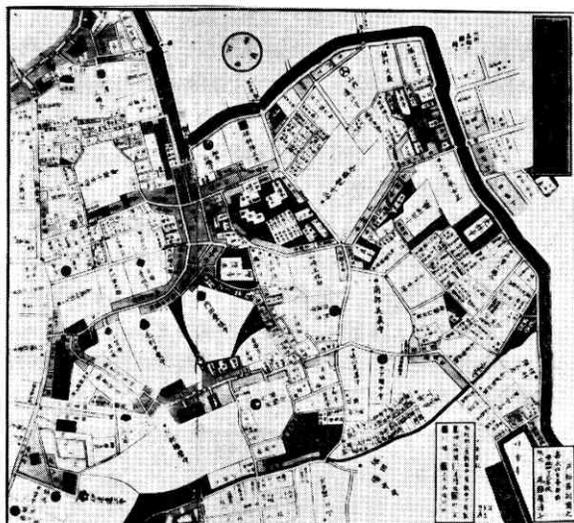
は、明治 11 年 11 月の郡区町村編成法に基づくものである。ここでは、この旧麻布区に範囲を限って生研周辺をながめることにする。

## 2. 麻布付近の地勢と地名

麻布には坂が多い。武蔵野の台地が東京湾沿岸の沖積



第 1 図 麻布付近の地勢



第 2 図 江戸切絵図のうち麻布の部 (嘉永 4 年新刻)

層に終わるところだからである。この台地は、いわゆる山手台地の一部である。これは速く秩父山塊に発するもので、ほぼ甲州街道にそって南下し、東京に入ると新宿付近から三つの大きな岡脈に分れる。まず四谷塩町・麴町・九段方面への台地と、赤坂離宮・紀尾井町方面への台地とに分かれ、四谷台より南進する一支脈は、信濃町・神宮外苑を経て分岐し、赤坂・青山墓地台地と、青山台地を形成する。またこれらの中央を縫って信濃町から青山一丁目・竜土町・六本木を経て芝区に達する支脈があり、六本木付近から今井町台地・飯倉町台地・本村町台地の三つの丘に分かれる麻布台地を形成している。このため台地と谷とが入りこんで坂が多く、旧麻布区内だけでも有名無名 50 余ある。有名なものでは、六本木交差点から日ヶ窪へ下る芋洗坂(昔、芋問屋が軒を並べ、毎朝芋市が立ったという)・市兵衛町と三河台の間の市三坂・狸穴坂・鳥居坂・永坂・南部坂・靈南坂などがある。その他狸坂に狐坂、うどん坂から暗闘坂までである。

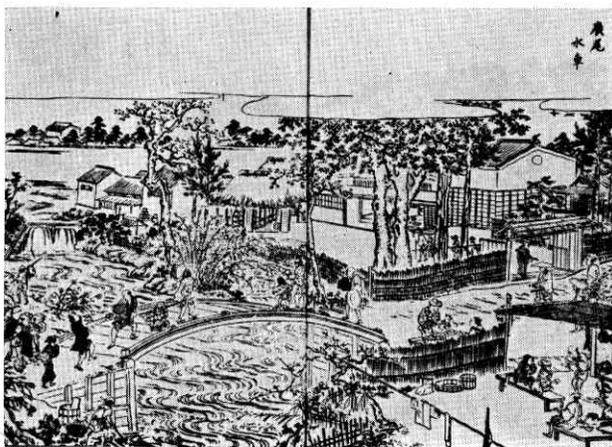
坂を下ると谷がある。我善坊谷や谷町あるいは日ヶ窪がある。また青山墓地の丘の両側から流れ出した川は霞町で合し、広尾川(または筈川)となり、筈町を経て天現寺橋付近で渋谷方面からくる渋谷川と合して古川となり、旧麻布区の南を限って、現在の都電古川橋・三ノ橋・二ノ橋・一ノ橋を流れ、赤羽橋から芝を通過して海にそそいでいる。その下流は赤羽川・新堀川・金杉川とも呼ばれている。広尾川は今は暗渠になっている。四谷から品川行の都電が通っているところである。この流域一帯は広尾の原、または土筆が原とよばれた広々とした原野であった。水車も回っていたらしい。

このように台地や谷や川があるため、麻布の土地の標高差はかなり大きい。生研庁舎正門前で海拔 30 m、六本木交差点もほぼ同じ、材木町あたりで 31 m が最高、これが北日ヶ窪では 16.2 m、古川橋辺で 9.6 m、二ノ橋では 5.2 m、大きな高潮でも襲来すれば、たちまち水没する低さである。

麻布の地名は、古くは「阿佐布」、「阿左布」とかかれていたが、『文政町方書上』によれば、正徳 3 年 (1713) このあたりが町奉行支配になった頃から「麻布」と書き改められたということである。地名の由来は、このあたりが多摩川に近く、麻の生えていた土地なので、その麻により布などを織ったということから生じた名であるといわれる。すなわち『文政町方書上』の麻布本村町の部には、「麻布起立之儀は、古来村名阿佐布と旧記に有之、其後町と相唱候処、正徳三巳年町御奉行所御支配に相成候此より、麻布と文字書改候、此訳は往古此辺一円百姓地に而、御代官伊奈半左衛門様御支配所に御座候、其比百姓耕作の助に麻を作り、女子共手業に布を織り、又麻苧紙と申を漉き、渡世を致候由、依之、阿左布を麻布と



第 3 図 広尾原—今の広尾町から元広尾町一帯 (昭和 3 年発行、江戸名所図会より)



第 4 図 広尾の水車図 (同上)

文字相改候由、申伝候」とあり、また『江戸砂子』にも「麻布の地名は能く麻の生る地にて、布の事にあらず、又浅茅生と云て、草の浅々生る地をも云とも云、元は浅生なり、古来の御図帳には麻生と書しよし古老物語なり」とある。「多摩川にさらす手作りさらさらに なにぞこの娘のここだ愛しき」。万葉の東歌が想い出される。

いずれも麻布の地名は、麻に関係深い。麻はいうまでもなく古代のもっとも重要な繊維原料。総（フサ）ともいい、上総・下総の地名も麻に関連する。下総から麻布へ、生研は麻に縁が深い。

文献に初出の麻布の地名は、永祿2年（1559）の『小田原衆所領役帳』の「阿左布」である。しかし地理的には後の麻布区と必ずしも一致しない。

江戸初期 寛永年間（1624～43）に幕府が鷹場の制を定めたとき、設けた「麻布領」はきわめて範囲広く、府内にあつては青山・渋谷・麻布・飯倉・芝・三田・白金・高輪等数百町。府下では豊島郡十六村・荏原郡五村となっている（『府内備考』・『新編武蔵風土記稿』）。しかし後世はそれほど広くなく、『江戸砂子』によれば、「竜土・桜田・谷町・市兵衛町・六本木・上ノ町・雑色をもって麻布七村とす」とあり、『府内備考』では境域を「東南は新堀川に限りて三田に対し、北は飯倉・赤坂に続き、西は渋谷・青山に境す」としている。

### 3. 原始時代から江戸まで

さて、原始時代から戦国の世まで軽く目を走らせてみよう。

麻布本村町（がま池近辺）、宮村町、青山墓地西北部、三軒家町（麻布中学校裏）、飯倉町（熊野神社）等に発見された貝塚から縄文式土器が出土、弥生式土器は赤坂氷川神社境内古墳、都下有数の大古墳といわれる芝公園丸山古墳から発見された。これよりみて、このあたりには原始時代より人が住んでいたことがわかる。

7世紀の半、大化改新が断行された頃、このあたりは武蔵国荏原郡に属していたと考えられ、古川（赤羽川）



第5図 麻布善福寺の図（同前）

あたりを境として、三田・白金・高輪を御田郷、赤坂・青山・麻布・芝を桜田郷に分けたらしい。武蔵国の原野は牧場として利用され、旧区内には相当数の村落があったと思われる。

平安初期には、天長元年（824）空海が善福寺を建立したと伝えられている。

寿永3年（1184）、源頼朝が伊勢大神宮に「みくりや（御厨）」として飯倉を献じたという記録が残っている。飯倉や三田（御田）の地名の起りである。「みくりや」は「みくり」とも言い、神領の一種である。

また鎌倉時代の伝説として、木曾義仲の部将今井四郎兼平が、現在の今井町を中心とする高台に、また熊谷次



第6図 筈橋一霞町交差点付近（同前）

郎直実が、芝西久保城山町より麻布市兵衛町一丁目にかけての高台、俗称城山に居城をおいたと伝えられている。頼朝挙兵の30年程前から、江戸氏と称する豪族が現われ、その領地は台東・文京・新宿・千代田・中央・渋谷・世田谷・港区に及んでいたと思われる。

江戸氏の後、太田道灌が江戸に入った。道灌が暗殺され、代わって江戸城に入ったのは扇谷上杉氏であるが、高縄原の合戦（1524）に敗退すると、小田原北条氏のものとなったのである。しかし小田原城の支城として栄えた江戸城も、豊臣氏の先鋒徳川家康に収められることになった。

徳川家康は天正18年（1590）に江戸に入ったが、すでにその前小田原攻略の最中に、青山忠成・内藤清成の両名を派遣して、江戸の都市計画（縄張り）を開始していた。この功によって内藤は今の内藤新宿一帯、青山常陸介忠成は

青山に宏大な邸地をたまたわった。『参考落穂集』、『寛政系譜』等の説によれば、家康がこの地に鷹狩の際、青山忠成に命じ、老馬をもって一円に乗り回らせ、その地をたまたわったものであるといわれている。西部劇を思わせる話で、老獺な家康の図に当たって、馬は途中でたおれて死んだが、その地は非常に広大なもので、青山南町・北町の過半、新坂町、表町方面まで含んでおり、老馬の倒れた地に塚を築き、これを駒留八幡（破れ八幡）と称したという。この八幡社は、明治初年まで新竜土町2、乃木坂下り口の交番の向いの教蓮寺のそばにあったから、その邸地は竜土町にまでおよんでいたのである。

また青山高樹町には、町名由来の元となる高木主水正正次が、早くから邸を構えていた。

六本木町は、もと飯倉六本木と称し『御府内備考』によると松の巨木が6本あったからだといわれ、また他の書物では上杉・朽木・高木・青木・片桐・一柳と木に関係ある6人の大名の中屋敷あるいは下屋敷があったからだという。

今、六本木交差点のそばに四つの寺が散在する。寛永の頃、二代將軍秀忠夫人（淀君の妹）の葬儀が行なわれ、このあたりで茶毘に付された。儀式を勤めた深広寺・光専寺・正信寺・教善寺にこの地をたまたわり、寛永6年（1629）に移転してきた。徐々に門前町として六本木から飯倉にかけて発展してきたのである。元祿年間には、数十騎の旗本がこのあたりに移ってきた。

現在の交差点は、当時の正信寺・光専寺の門前に相当し、御書院番組のあたりが麻布警察署である。

#### 4. “りゅうど” 起源と檜屋敷

生研の正門を出るとすぐ六本木の方に抜ける斜めの道がある。その途中左側に、あまり目立たない鳥居が立っている。これが竜土町の氏神である天祖神社で、もと竜土神明といった。伊勢大神宮を祀っている。

起立は後小松天皇至徳元年（1384）で、以前飯倉城山（現西久保城山町）にあった。元和年間（1615～23）城山が、幕府の御用地となったので現地に移ったのである。

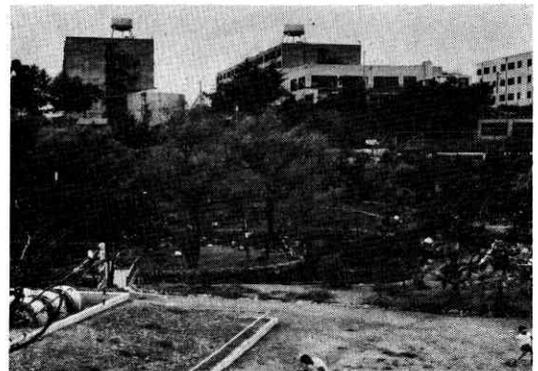
毎夜、竜が品川の浦から灯明を献じたので竜灯山と称し、これが竜土町の地名の起りといわれている。一説には、城山付近には漁師が住んでいたが、竜土神明とともに、この地に移り、漁師（獵人、かりうど）の称が、なまったともいう。いずれも確かでない。また流道の文字をあてるともいわれるが、大雨の降った時など、まったくピッタリする。

幕末の切絵図などには、竜土六本木とか竜土材木町とか、ぼくぜんと、しかも広い範囲に竜土町の地名がわたっている。大部分武家屋敷地であり、若干の寺院地が含まれていた。明治5年（1872）、御先手組屋敷・大番組屋敷その他をあわせて正式に竜土町を立てた。また明治11年（1878）郡区町村制施行の際、鍋島甲斐守（肥

前蓮池5万石）・鍋島備中守（肥前鹿島2万石）・伊達遠江守（宇和島10万石）の上屋敷地、寺地、畑地と原宿村の飛地の一部をあわせ新竜土町が独立した。

家康の入府後、江戸の町々もようやく整い、泰平の世の中になった頃、麻布はほとんどが諸大名の中・下屋敷・寺院であり、わずかに町家・百姓家があった。郊外閑寂の地であるため、四季折々の楽しみを求めて文人墨客の杖を引くところで、“うぐいすを 尋ね尋ねて 麻布まで”と句にまでうたわれているように、のどかなところであった。

今の防衛庁の一带は、檜町の名の起りとなった俗称檜屋敷跡である。大熊喜邦博士も「麻布御屋敷大差図私考」（建築雑誌、大正8）で考証されているが、長州藩主松平大膳大夫の中屋敷があった。邸内には多数の檜樹があったという。その庭園は「清水亭」とよばれ、江戸名



第7図 松平大膳大夫中屋敷（檜屋敷）「清水亭」跡、後方は防衛庁

園の一つに数えられたものであった。現在防衛庁の裏手にある公園がこの庭園跡である。荒れてはいるが柳樹の影が池に落ち、子供たちのよい釣り場になっている。

元治元年（1864）7月、長州藩が蛤御門の変を起こした時、むかつ腹を立てた幕府は江戸の長州藩邸取毀しを命じた。上屋敷の方は、文久2年（1862）攘夷論で幕府と衝突した時に、大方引き払って国許へ運んだ後だったが、檜屋敷の方は多数の土蔵建物を強引に引き潰した。

この時の始末を『嘉永明治年間記録』は、つぎのようにのせている。「幕府に於て毛利家の江戸邸を毀つ（元治元年甲子8月）八月十一日、十二日、十三日江戸中火消人足御呼揚げ、暁七時頃より出火の通り江戸市中自身番屋にて半鐘打立、夫を合図に江戸中人足集い、諸道具類諸書物類は越中島にて焼捨る。此時上屋敷は既に去文久二戌秋、家族国邑引越しの時、建家荒増取払い国許へ運送せし由、四方長屋向は存したるに依て、此度不残引潰し、檜木屋敷と唱ふる中屋敷は土蔵二十ヶ所余、普請惣体建坪二万坪と云、柱通二三尺上より大鋸又は鉋斧を以て伐付け、大綱を付けシャチにて巻き不残引潰せしが、畳建具瓦等其儘にて引潰したる故、大に取片付に難渋、格別の手間掛り、江戸中の人足数日御呼上げ、本品は江

戸中湯屋へ下されと成る」この屋敷跡は明治に入ると官収され、第1連隊が移ってくる。

### 5. 善福寺と深広寺

麻布山元町には、浅草寺につぐ江戸の古刹善福寺がある。天長元年(824)弘法大師の開創と伝えられるが、親鸞聖人巡錫の折に真宗に改宗したという。地にさした聖人の杖が芽をふき、聖人御杖の銀杏、また逆銀杏として世に有名であり、天然記念物に指定されている。安政6年(1859)この寺にアメリカ公使館が置かれ、下田よりハリス、ヒュースケンらが移ってきた。『善福寺略史』



第8図 麻布善福寺内ハリス記念碑  
(朝倉文夫彫刻, 益田孝書)

に「ハリスは、本堂南間の脇ノ間の上を居所に、次の間を応接室に、下陣の南縁側を食堂として不便な生活をしていた。また、ハリスは日米の国交に支障となる事件の突発をおもって、日常は門外に一步も出ず、朝夕の運動はいっさい本堂の縁側で行ない、そのために本堂の櫺の板は寸余もおしつけられた」と伝えられている。

明治8年(1175)築地鉄砲洲の居留地内に、公使館が設置される迄公館として使用されていた。同寺の境内には朝倉文夫彫刻のハリス胸像銅板をはめ、ハリスのボーイをつとめ後に初代アメリカ公使になった三井の大番頭益田孝書による記念碑が建てられている。万延元年(1860)中ノ橋で攘夷派の浪士に暗殺されたハリスの通訳ヒュースケンの墓は、麻布富士見町光林寺にある。

近くの寺では、六本木交差点から少し竜土町よりバス停留所のところに深広寺がある。寺内に高名な儒者佐藤一斉の墓があり、都の史蹟に指定されている。佐藤一斉は、むしろ波辺華山描くところの肖像画でよく知られている。戦災で本堂も焼失し、寺とは名ばかりの小きなものになってしまっている。かつては、その縁日に今の電車通に露店が並び、たいそう賑ったという。

### 6. 明治——ラッパのひびき——

慶応4年(1868)大政奉還後、江戸は東京と改称され東京府が開設された。

諸藩邸は廃止あるいは縮小され、旗本その他の旧藩士はほとんど居所を転じた。また明治4年(1871)には、

寺社の朱印地の上納を命じた。これにより空地の激増と地価の大暴落をきたし、武家に依存していた町人の失業する者が多く、繁華な街も衰退の一步をたどった。

新政府はその対策として、明治2年(1869)諸邸の上地跡を開墾させ、主として桑・茶を植えつけさせた。畠地は10カ月間無税、桑茶園は42カ月間無税とし、43カ月目から6カ年の間、土地から生ずる利分の15分の1を上納させる法をとった。それにより桑茶栽培が大流行することとなったが、漸次市街の発展にともない減少していった。現在、諸所に桑・茶の樹が見られるのは、この時の名ごりである。

明治になって、新竜土町・檜町・青山南町一丁目あたりはまったく官衙の地となった。長州檜屋敷跡には明治6年(1873)東京鎮台歩兵第1連隊第2大隊、第3大隊が移ってきた。洋式の兵舎から朝夕ラッパの音が聞こえてくるようになったのであるが、まだまだ田舎で、三河台あたりには牧場があり、牛乳を売る店があった。明治17年(1884)、芝愛宕下にあった第1大隊も移転してき、歩兵第1連隊全部が檜町兵舎にまとめられた。ここには、明治11~16年(1878~83)まで乃木希典が連隊長として在任していた。

生研の所在地新竜土町が独立したのは明治11年(1878)であるが、明治5年(1872)当時にさかのほって戸数・人口をみると、まったく寂しいところである。人口わずか29人、しかも本籍を有するもの華族1戸、僧侶1戸で士族9戸は寄留(東京府戸数人口調査)という状態であった。この時麻布区全体では、人口21,660人、戸数5,532戸である。全戸数中士族戸数が最も多く79%をしめている。

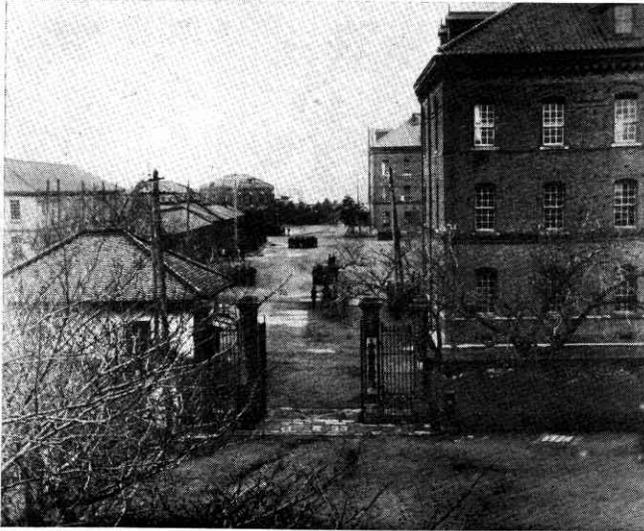
明治21年(1888)、呉服橋内にあった東京鎮台歩兵第3連隊が、当時最新の兵舎といわれた煉瓦造3階建の建物に移ってきた。生研の敷地である。丸の内の三菱が原の払下げ計画が進行していたときで(三菱への払下げ決定は明治23年)、その鎮台移転の先頭を切ったものである。このかわいにも、ほつほつと兵隊相手の店が現われ、休日などには賑った。兵隊の給料日のカフェでは、普通のお客はいくらお金を持っていても、相手にされなかったという話を聞いた。

昭和3年(1928)8月には、現在の3階建鉄筋兵舎ができた。この建物も当時としては最新式の兵舎で、『建築雑誌』昭和3年512号に詳細が紹介されている。この歩兵第1、第3連隊および近衛歩兵第3連隊の皇道派青年将校たちが、兵1400をひきいてけっ起したのが、昭和11年2月26日のいわゆる2・26事件である。

戦後、第1連隊兵舎と同じく接収され、ハーディバラックスと呼ぶ駐留軍兵舎となっていた。

### 7. 文学散歩

生研近辺の文学散歩は、まず竜土軒から始まる。竜土軒はフランス料理の店として、古くから有名である。西

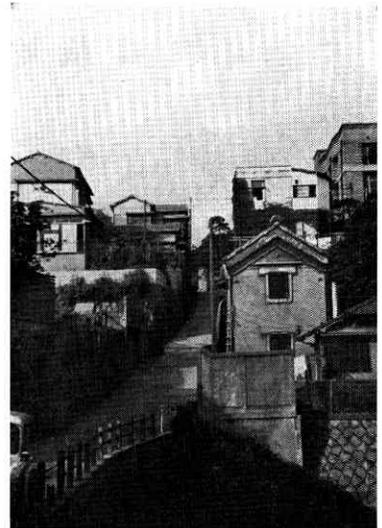


第9図 歩兵第3連隊兵舎，煉瓦造3階建，明治21年12月竣工

洋人のところでまなんだという主人が、店を出したのはもう60年も前の明治33年(1900)である。このハイカラな料理店を見つけてやってきたのが、日本で最初に西洋美術史を講じた岩村透で、旧白馬会の和田英作や岡田三郎助などフランス帰りの新進画家たちが、逐次集まるようになった。白馬会は明治29年(1896)黒田清輝・藤島武二らが、明治美術界の官僚性に反ばつて結成した会である。赤坂あたりにあった一ぱい飲屋に集って、白馬という名のショーチューを飲みかわしていたところから出た名という。こうしたなかから明治37年(1904)頃に竜土会が始まった。それまで牛込の柳田国男の家に集って、芸術談にふけていた国木田独歩・田山花袋・島崎藤村・川上眉山・小栗風葉・蒲原有明らが、会場を竜土軒に移し、竜土会と称したのである。画家・作家・詩人の多彩な顔ぶれであったが、しだいに作家が多くなり、『自然主義文学は竜土軒の灰皿から生まれた』(近松秋江)といわれるほど盛んになった。しかし明治41年(1908)独歩が死に、藤村が大正2年(1913)渡仏する頃になるとすっかり衰え、会も終わりになったが、飯倉片町に住んでいた藤村などは、その後もときどき竜土軒の片隅で、在りし日を懐しんでひとときを過ごしたという。

大正4年(1915)第2期の竜土会が始まり、田山花袋・徳田秋声・近松秋江・小山内薫などがしばしば姿を見せた。早稲田派・赤門派・文学界派・硯友社派など当時の文壇のすべての派を含む会であった。まだ若かった小山内薫は「詩人も来た。小説家も来た。評論家も来た。画家も来た。私のような後輩は、この会へ出席できるというだけでも、非常な感激であり、非常な光栄であった。」と記している。

その他、近辺の文学遺跡を訪ねてみると、飯倉片町郵政省前の電車通りから、狸穴坂(ソヴィエト大使館脇の



第10図 飯倉片町藤村旧居跡より植木坂をのぞむ

坂)と平行の急な植木坂を南へ下りきる。おりきった左手は道より2~3m低い空地になっている。ちょうどその前あたりが島崎藤村の旧居跡である。彼は西久保桜川町の旅館で「桜の実の熟する時」を書いたのち、大正7年(1918)ここに移り、約18年間住んだ。「新生」・「エトランゼエ」・「夜明け前」などを著し、彼がもっとも落も着いて仕事をしたのはこの頃であった。「飯倉附近」という文章の中にも、このかいわいの情景がでているが、梟の鳴くような静かな谷間の町であった。

植木坂を登り都電通りへ出、郵政省から少し六本木よりの道を右へ、麻布小学校の前を通り、T字形に突きあたった通りを右に折れる。霊南坂通りへ出て、フランス大使館の手前の坂を左の方に下る。ごろごろした砂利道を行き止った右側一帯が麻布市兵衛町1の6。永井荷風の偏奇館のあったところである。大正9年(1920)5月42才のとき、木造2階建の偏奇館を新築。戦災で同館が焼失するまで約25年ここに住んだ。彼はここで「二人の妻」・「つゆのあとさき」・「墨東綺談」などを著わし、偏奇館炎上のありさまは、「罹災日録」に書かれている。そのほか、生研庁舎付近、旧麻布区内には春秋に杖を引く名所・旧蹟が多い。巷塵のしみた身に、思いがけず一刻の清遊を得た場所も多い。

#### おわりに

駈け足で生研庁舎付近の歴史を見た。書き落としたことも多いが、また折を見て補ってゆきたい。住む土地に愛着をもち、腰が落ちつくことによって自然科学や工学の研究が、少しでも増進されるとしたら、筆者らの望外の幸いである。なお本稿は、昭和38年9月生研における輪講会の村松の講演に手を入れたものである。資料としては「赤坂区史」・「麻布区史」・「港区史」などの世話になった。野田宇太郎氏の「新東京文学散歩」もたいへん参考になった。また麻布図書館長をはじめ多くの方々のご教示も有難かった。記して厚く感謝する。

(1963年11月4日受理)